

ティーチング・ポートフォリオ

日本国際学園大学 経営情報学部 ビジネスデザイン学科
黄 明淑

教育の責任

教育の責任とは何か——知識を与えることか、生き方を示すことか。

この根本的な問いに対して、古今東西の多くの思想家や教育者たちが向き合い、さまざまな答えを提示してきた。その中でも、「授人以魚，不如授人以漁（人に魚を与えるより、魚の釣り方を教えよ）」という中国のことわざや、「真正的教育は言传身教，以身作则（本当の教育とは、言葉で教えるだけでなく、自ら模範を示すことである）」という作家・楊絳の言葉は、教育の本質を鋭く突いている。

この二つの言葉が示しているのは、教育とは単なる知識の伝達にとどまらず、学生が自ら学び、生きる力を育むための支援であるということだ。教育の責任とは、学生に「何を教えるか」ではなく、「どのように学ぶ力を育むか」、さらには「どのように生きる姿勢を伝えるか」にかかっている。すなわち、教育とは受動的な情報の受け渡しではなく、学生が自立して考え、行動できる力を養うための能動的なプロセスなのである。

近年注目されている「探究的な学習」や「PBL（Project-Based Learning／プロジェクト型学習）」は、まさにこの理念を体現している。学生自身が課題を設定し、情報を収集・分析しながら、協働的に解決へと導く学習プロセスは、知識そのものよりも、**課題解決能力、創造性、主体性、そしてチームワークといった「生きる力」**の育成を重視する。このような教育実践は、変化の激しい現代社会において、学生が柔軟かつ力強く生き抜くための土台を築く。

同時に、教育者や保護者が果たすべきもう一つの重要な役割がある。それは、自らが学び続け、誠実に生きる姿を学生に示すことである。言葉で「正しさ」や「努力の大切さ」を語るだけでは不十分であり、日々の行動や判断において、模範となる姿勢を体現することこそが、学生に深く届く教育となる。「背中で語る教育」が、知識よりもはるかに強い影響を与えることは、古今変わらぬ事実である。つまり、「釣り方を教えること」と「自ら模範を示すこと」は、どちらも学生が将来、自立して社会を生き抜くために不可欠な教育の柱である。教育とは一時的な成果を求めるものではなく、学生の未来に対する長期的な投資であり、知識よりも力を、言葉よりも行動を通じて伝えることが、私たち大人に課せられた最も重い責任である。

科目名	対象 学年	受講 人数※	授業 形態	必修 選択	科目区分 (カリキュラムにおける位置づけ)
日本語A1③	1	14	講・演	必修	入学科目群 (1 年次から履修できる教養系科目)
日本語B1③	1	14	講・演	必修	入学科目群 (1 年次から履修できる教養系科目)
論理的思考と文章作成(留学生)	2	30	講・演	選択	総合教養 (2 年次から履修できる教養系科目)
ロジカルライティング(留学生)	2	30	講・演	選択	総合教養 (2 年次から履修できる教養系科目)
留学生演習 C	3	10	講・演	選択	総合教養 (3 年次から履修できる教養系科目)
留学生演習 D	3	10	講・演	選択	総合教養 (3 年次から履修できる教養系科目)
日本文化・ビジネス入門	1	(若干名)	講・演	選択	専門基礎・共通 (コース共通の専門科目)
基礎ゼミ 3	2	(若干名)	講義	必修	専門基礎・共通 (コース共通の専門科目)
基礎ゼミ 4	2	(若干名)	講義	必修	専門基礎・共通 (コース共通の専門科目)

教育の理念

日本国際学園大学が掲げる「語学力と異文化理解力を基盤に、世界と地域をつなぐ国際人材の育成」という理念に、私は深く共感しております。特に、大学共通コア科目における段階的な語学教育の体系化や、初年次からの少人数教育を通じて、学生の主体性と国際的視野を育む教育方針には、強い親和性を感じております。

私自身もこれまで、教養科目や教職課程の授業において、「読む・書く・話す・聞く」の四技能を統合的に伸ばすことを目的とし、アクティブ・ラーニングやプロジェクト型学習（PBL）を積極的に取り入れた授業設計と実践に取り組んでまいりました。学生が自ら問いを立て、他者と協働しながら課題解決に向かう学びは、まさに貴学の教育理念に通じるものと確信しております。

また、コロナ禍を契機に導入したハイブリッド授業や ICT 教材を活用した遠隔授業の経験は、貴学が展開する多様な学習スタイルやオンライン語学教育にも柔軟に対応できる強みとなります。特に、初年次の少人数演習においては、学生の日本語運用能力や異文化対応力を丁寧に育成する必要があり、これまでの教育実践に基づく知見を活かして、貴学においても即戦力として貢献できると自負しております。

さらに、私の専門である社会言語学においては、日中間の「誘い」談話に関する比較研究を進めており、異文化理解教育や国際共修の場において、理論と実践を結ぶ教材・アクティビティの素材として活用が可能です。言語の違いが生むコミュニケーションのずれや文化的価値観の相違を可視化するこの研究は、多文化共生社会における異文化感受性の育成に資するものであり、グローバル人材育成における実践的知見として位置づけられると考えております。

今後は、これまで蓄積してきた教育・研究の成果を活かし、日本語教育の基礎から応用・実践領域まで、学生の関心や将来像に応じた多層的かつ柔軟な学びの場を提供してまいりたいと考えております。特に、PBL やアクティブ・ラーニングを中核とする教育を通じて、学生が自らの問題関心を深め、地域社会や国際社会とつながる「実践知」を身につけられるよう指導に努めてまいります。

また、日本語教育を通して、グローバルな視野とローカルな責任感を兼ね備えた人材の育成を推進し、世界の平和と持続可能な社会の実現に貢献したいと考えております。国際性と伝統文化が融合する京都という立地特性を活かし、アジア諸国の大学との国際共同授業や交流プログラムの展開にも積極的にに関わり、地域と世界をつなぐ日本語教育・研究の拠点形成に尽力したい所存です。

以上のように、私は教育と研究の両面において、実践的かつ国際的な視点から着実な成果を上げ、貴学の日本語教育と国際交流の特色強化に貢献し、新たな学術的・教育的価値の創出を目指してまいります。

教育の方法

これまで 17 年間にわたり、大学および日本語学校における教育指導に携わるとともに、社会言語学や異文化コミュニケーションの知見を活かして、教育と研究の両輪で活動してまいりました。

2008 年から現在に至るまで、初級・中級の日本語指導を開始して以来、「中上級日本語（N2 文法）」「JLPT N1 対策」「実践日本語」「初級日本語」「入門日本語」など、複数の高等教育機関にて多様な科目を担当しております。また、「日本の文化と言語」「日本史」「文章表現」「教養基礎演習」「キャリア開発演習」など、留学生向けの教養科目に加えて、キャリア教育の一環としての言語運用科目にも携わっています。また、お茶の水女子大学の文教育学部で「日本事情」の講義経験もあります。現在の日本国際学園大学では、留学生向け教養科目のほか、アカデミック・ライティングやゼミ指導にも従事し、学生の学術的能力の向上に貢献しております。さらに、ヒューマン・アカデミーや Nippon アカデミーなどの日本語教師養成機関では、「社会言語学」「異文化コミュニケーション」「日本語教育概論」「日本語教師とは」など理論と実践の両面にわたる科目を担当し、次世代の日本語教師育成にも力を注いでまいりました。

指導対象は、日本人学生のみならず、中国・韓国・ベトナム・タイなどのハイコンテキスト文化圏からの留学生や、アメリカ・オーストラリアなどローコンテキスト文化圏からの留学生など、多様な文化的背景を持つ学生を含みます。こうした経験から、学生の文化的特性や学習目的に応じて柔軟かつ実践的な授業設計を行う力を培ってきたと自負しております。

教育手法としては、アクティブ・ラーニングや PBL（課題解決型学習）、ICT の活用を重視しており、特にコロナ禍以降はハイブリッド型授業の設計・実施に取り組み、学生の主体性と双方向性を引き出す教育環境の構築に努めてきました。多文化背景を持つ学生との対話を通じて、文化的差異への理解を深め、それを授業に応用する力の育成にも力を入れております。

これらの教育経験と手法は、日本国際学園大学が掲げる「多文化共生社会に対応したグローバル人材の育成」や「実践的かつ協働的な学び」の理念と強く合致していると考えております。今後も貴学の教育方針に沿い、多様な学生のニーズに応えられる質の高い教育を提供してまいります。

教育の成果 および今後の目標

私の研究は、日中の「誘い」談話に関する社会言語学的比較分析を軸としており、量的・質的両面のデータ解析を通じて、文化的差異が対人コミュニケーションに与える影響を明確に示しています。この研究は、多文化共生を推進する日本国際学園大学の教育理念と深く結びついています。2021 年度には、公益財団法人日本語教育学会の「グローバル人材奨励プログラム」に採択され、「コロナ禍の日本語教育における日中韓国際交流プロジェクト」を推進しました。本プロジェクトでは、日本・中国・韓国の教育者が連携し、コロナ禍における日本語教師の困難を半構造化インタビューと KJ 法で分析しました。その成果は査読付き論文『コロナ禍のオンライン教育で日本語教師が抱えた困難の実態—日中韓日本語教師の半構造化インタビューによる KJ 法分析—』として刊行され、国際的な教育課題の実証的理解と解決策の提示に貢献しております。加えて、コロナ禍以降はオンライン環境におけるアクティブ・ラーニングの研究と実践に注力し、学生の主体的な学びを促す教育手法を開発してきました。これらの経験は、日本国際学園大学が推進する ICT 活用教育やハイブリッド授業の質的向上に直結すると考えています。現在、科学研究費補助金（課題番号 21K20217）を得て進めている研究では、異文化接触場面における談話戦略の違いを明らかにし、これを異文化教育の教材設計に応用することを目指しています。この研究は、多文化背景を持つ学生の協働的学びを促進し、グローバル社会で必要とされるコミュニケーション能力の育成に貢献するものです。今後は、これらの研究成果を教育実践に積極的に還元し、学生が多様な文化的価値観を理解し、協働できる力を育む教材開発と授業設計に取り組みます。また、国際共同研究のネットワークを活用し、国際交流やグローバル人材育成の推進に一層寄与していく所存です。以上のように、私は研究と教育の両面から、日本国際学園大学の教育理念と調和しつつ、実践的かつ国際的視点での人材育成に貢献し、新たな学術的・教育的価値の創出を目指して邁進いたします。

参考資料

BONWELL, C. C., & EISON, J. A. (1991) Active Learning: Creating excitement in the classroom. ASHE-ERIC Higher Education Report No. 1.

Felder, R. M., & Brent, R. (2009) Active learning: An introduction. ASQ Higher Education Brief, 2(4), 122-127.

中井俊樹編著（2015）『アクティブ・ラーニング（シリーズ大学の教授法）』玉川出版

文部科学省（2014）「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討

栗田佳代子、吉田壘（2020）「教育活動の振り返りを目的としたティーチング・ポートフォリオ・チャートおよび作成研修の開発と評価」『高等教育開発 1』,pp.19-27,日本高等教育開発協会.

吉田壘（2004）「アクティブ・ラーニング型 Web システムの開発と FD における活用と評価」『日本教育工学会論文誌』42 (1) : 89-104